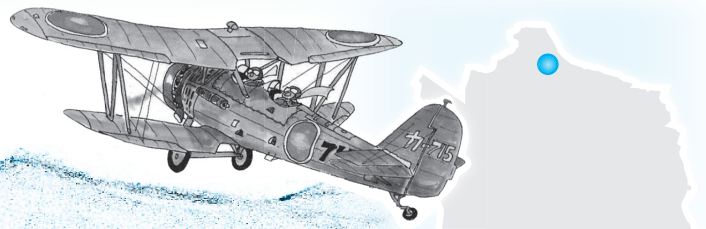
予科練平和記念館だより



予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍に関するお話しや写真を集めています。ご存じの人はぜひご一報ください。

本格的に夏へ向かう気配とともに、いよいよ4年に1度のオリンピックが近づいてきました。皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

フランスのクーベルタン男爵の提唱によりはじまった近代オリンピックですが、日本が最初に参加したのは1912（明治45　大正元）年のこと、8年後のアントワープオリンピックでは、テニスの熊谷一弥・柏尾誠一郎が見事銀メダルを獲得し、日本人初のメダリストとなりました。1928（昭和3）年のアムステルダムオリンピックでは、織田幹雄（三段跳び）と鶴田義行（200メートル水泳）が金メダルの栄光に輝き、経済不況にあえいでいた日本を勇気づけました。また忘れてはならないのが、同じアムステルダムに出場した人見絹枝です。この大会から女子も陸上競技に参加できるようになりましたが、人見は800メートルで見事銀メダルを獲得、日本人女性初のメダリストとなりました。彼らのまなざしの先にあったもの、それは今年の北京オリンピックに出場する選手たちにとっても同じものかもしれません。時代を超えて国を超えて、たった一つの目標に向かえることがスポーツの素晴らしさなのだと思います。

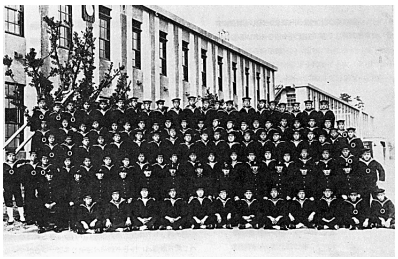
●メダル、そして予科練

さて、日本に初の金メダルがもたらされた年、旧海軍内部ではある動きが起こっていました。そのころ世界では、リンドバーグが大西洋単独無着陸飛行に成功し、大型飛行船ツェッペリンLZ127号が世界一周飛行を成功させるなど、飛行機に対する関心が高まりつつあった反面、第一次世界大戦後の国家関係の中で、軍事兵器としての整備も急速に進められていました。日本でも搭乗員養成の気運が高まる中、昭和3年にひとつの決定がなされました。少年航空兵養成制度の創設、すなわち「海軍飛行予科練習生制度」の誕生です。広く人材を募集して搭乗員を育てるこの制度は、パイロットにあこがれる少年や当時不況にあえいでいた農山漁村の少年たちにとって新たな進路となりました。

▲市丸利之助

2年後の昭和5年、約80倍の難関を突破して入隊した少年たちの教育を総括したのは、初代予科練部長市丸利之助でした。彼は霞ヶ浦海軍航空隊（現在の茨城大学農学部一帯）で飛行機の操縦訓練中に墜落、危うく一命はとりとめたものの、軍人としての責務が果たせないと自ら辞表を提出しました。しかし、海軍は短歌を好む文人でもあった市丸の人格と手腕を見込んで、それまで前例のなかった飛行予科練習生の教育を託したのでした。彼の理念のもと、はじめはのびのびと教育されていた予科練生たちでしたが、太平洋戦争に突入し、搭乗員養成が急がれるようになると、大量に採用され、速成教育を受けるようになっていきました。

大戦末期の1945（昭和20）年、激戦の地硫黄島に海軍側の最高司令官としてお



▲第1期予科練習生（『予科練外史（1）』倉町秋次著より）

りたった市丸は、時のアメリカ大統領に宛てた「ルーズベルトニ与フル書」をしたためた数日後に玉砕しました。硫黄島に出撃した特別攻撃隊の中には、多くの予科練出身者がいたことも記さねばなりません。

●

1932（昭和7）年、ロサンゼルスオリンピック障害馬術の表彰式で、その胸に金の輝きを身につけた西竹一（バロン西）は、13年後、陸軍中佐として市丸と同じ硫黄島にいました。世界の舞台でともに戦った愛馬ウラヌスのたてがみを身につけ、軍服に乗馬靴を履いていた彼の最期は、戦死したとも自決したとも言われています。戦場に散ったメダリストが見たものは何だったのだろうかと想うと、オリンピックはいつの世でも、その根本原則にのっとり「人間の尊厳保持に重きを置く、平和な社会を推進する」という大会であってほしいと強く願います。

◇　◇

夏季特別展を開催

期日：8月2日（土）～17日（日）
※月曜日を除く
時間：午前9時～午後5時
場所：図書館2階視聴覚室およびギャラリー